St. Luke's International University Repository

聖路加看護大学年報: 2008年度（平成20年度）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-01-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/4728

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

XIII　学生生活への配慮

【学　　部】

1．学生部

学生部は、学生が本学の教育目標をいっそう効果的に達成し、豊かな大学生活を過ごすことができるように、その私的・公的生活を支援することを目的としている。2008年度の学生部の担当は、教員６名（うち学生部長１名）、健康管理担当保健師１名および学生課職員２名である。

主な活動は、次のとおりである。

- 学生生活を有意義にする支援：自治会、課外活動、行事(白楊祭、クリスマスの集い、創立記念行事)、チャペルアワー、キャンパスマナー、ボランティア、福利厚生など
- 学生生活の支援：奨学金、アルバイト、健康管理、心の相談、保険共済制度、紛失･盗難・拾得物の取扱い、 生活安全（マルチ商法･ストーカーなどからの自己防衛)、よろず相談窓口など
- 将来の進路への支援：進路(進学･就職)ガイダンス， 進路相談， 就職情報資料提供など
- 調査協力：外部からの調査依頼， 学内学生対象の調査など

本年度は、「適切なコミュニケーションによる学びの環境の実現」をスローガンに、他者を思いやりながら、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境の醸成を学生および教職員全員で共に考える機会をもつ初年度とした。こうした取り組みの背景には、核家族化、コミュニティの崩壊、生活習慣の変化などによる人とのつながりの減少、適切なコミュニケーションや人としての基本的なマナーを学ぶ機会の減少がある。適切なコミュニケーションや基本的なマナーは、社会生活を営む上でより良い人間関係を築くための基本であり、かつ看護専門職としても求められる重要な資質である。臨地実習などにもこれらの取り組みの成果が出ることを期待して、学園全体で取り組むことになった。

また、学園の危機管理対策システムの整備に関して、学生部は学生生活を支援する立場からかかわりをもつ。この役割を認識し、「聖路加看護大学新型インフルエンザ対策（案）」を健康管理室と共同で作成し、2009年２月17日に学事協議会での検討資料として提出した。これを契機に、危機管理対策のための組織化が次年度より行われることになった。

さらに、本年度は、学生の生活実態調査を2008年11月～１月に行った。学部生338名に配布し、149名から回答を得た（回収率44％）。調査の結果、学生の往復通学時間は平均82.7±13.6分（最小５分、最大260分)、睡眠時間は平均5.7±1.1時間（最小２時間、最大８時間)、実習中の睡眠時間は平均3.7±1.3時間（最小１、最大７時間)、自己学習時間は平均1.6±0.4時間（最小０、最大10時間）であった。課外活動は、アルバイト、サークル活動、ボランティアなどを実施しており、回答者の94％の学生が１～４種類の課外活動を行っていた。経済面では、仕送りを受けている学生の１ヵ月の平均仕送り額は104±60千円であった。小遣いは月30千円が最頻値であった。また、経済状態について“かなり心配”あるいは“危機的”と答えた学生は26名（18％)、身体的な健康問題が“いつもある”と答えた学生は13名（９％)、精神的な健康問題が“いつもある”と答えた学生は12名（８％)、

気心の通じる人が“いない”と回答した学生は２名であった。これら問題があると思われる回答をした学生の数は、実際の相談件数などから把握している数よりもやや多い印象がある。今後も学生部、よろず相談および健康相談を利用するように呼びかけていく。

２．自治会活動

自治会活動に関しては、学生の主体性と自主性を大切にする支援体制をとっている。自治会は、会長１名、副会長２名、会計１名、書記１名、議長１名、会計監査１名の役員が運営の中心を担い、学生全員が自治会員を構成している。本年度も自治会規程に基づき、公正な役員選挙と総会運営が行われた。５月には、聖路加看護大学学生自治会定期総会が開催され、決算報告ならびに予算案の承認、学内クラブの設立承認等が行われた。

学生部は、学生代表らと月２回の定例ミーティングを開き、①学生生活上の問題についての意見交換、②学生からの要望の大学側窓口機能、③大学から学生への伝達内容の確認と伝達、④必要に応じた学生自治会活動の支援などを行った。本年度からは、学部の学生だけではなく、大学院生の代表も適宜定例ミーティングに参加し、学園生活支援について意見交換を行った。自治会の主な活動は次の通りである。

- 新入生歓迎会（各クラブ、サークルの紹介）の開催
- 学生総会の招集・議事進行
- 大学主催の新入生学内オリエンテーションの模擬チャペルアワーの実施
- 大学主催の新入生オリエンテーションセミナーへの協力
- 大学説明会(オープンキャンパス)への協力
- 白楊祭の開催
- クリスマスの集いの企画・運営；学生部、チャペルアワー委員会との協働
- 卒業生へのお祝いの品の贈呈
- ユニフォーム、参考書のリサイクル
- 「適切な学びの環境の実現」のための活動の一環としての、学園生活を支える人々（食堂の増井洋子氏、設備管理の越敏治氏）のお話を聞く会の開催

３．課外活動

１）白楊祭（学園祭）

１・２年生を主体に組織された白楊祭実行委員会の企画・運営により、2008年11月１～２日に第32回白楊祭；テーマ「個性～キラリと光る何かをみつけて～」が行われ、２日間に、1,156名の来場者を迎えた。主な企画として、実習着試着コーナー、肺活量測定、AED 講習などを設けた看護企画や、７年連続となる献血では71名の申し込みがあり最終的には49名が献血を行った。またバザーでは売り上げが54,628円ありユニセフに寄付されたほか、軽音楽部バンド演奏、聖歌隊・手話部、ダンス・演劇などの発表が行われた。講演会は、女優の忍足亜希子氏と本学の萱間真美教授を演者に迎え２回行われた。また、受験を考える来場者向けには「受験生相談コーナー」が開かれ好評であった。更に、学生自治会と学生部共催で、「適切な学びの環境の実現」キャンペーンの一環として、マナーコンテストを開催した。具体的には、マナーに関するポスター、ロゴマ

ーク、標語を広く学内から公募し、投票によって賞を選定した。学園賞には３年生の今井敬子さんが作成したロゴマークが選ばれた。

２）クラブ、同好会・サークル、ボランティア

2008年度のクラブは、農村医療研究会、軽音楽部、手話部、聖歌隊、ルカバイブルスタディ、ダイジョ部が活動した。ボランティアは病院やホスピス、老人ホームなどの施設、難病者や障害者のホームケア、障害者（児）のキャンプなど、幅広く行われている。海外へのボランティア旅行など、個人あるいはグループでの単発・短期的なものから、先輩学生より代々受け継がれている長期的なものまで多岐に渡っている。学生が2003年10月に創始した聖路加国際病院小児病棟でのボランティア活動は、他大学学生にも活動者が広がり、ニーズに即応した責任のある活動として年間を通じて行われ、新聞社からのインタビューが行われるなど、周囲からも高く評価されている。

３）聖路加ほっとストリート

学年を超えた学生主体の活動として６年目を迎えた月刊新聞「聖路加ほっとストリート」は、発行のたびに学内と大学近隣のおよそ30店舗に配布され、定着している。A4版手書きイラスト入りの新聞内容は、特長ある学生生活の一コマや健康に関する豆知識など看護学生ならではの紹介や、聖路加国際病院や本学を含む築地界隈の歴史を紐解いたもの、地元町内会の行事や店の紹介といった地域密着記事などである。折々の時節にふさわしく、また歴史や伝統を振り返るような趣のある内容で、地域住民と学生教職員の読者から好評である。病院および大学で開催される一般市民向けの活動案内・報告などを載せており、地域と「聖路加」との交流に貢献している活動といえよう。

４）HAS（Health Association of Students）

1993年から2006年まで13年間続いた看護学生弁論大会は、運営者が少人数となったことに加え、弁論応募が少なかったことから2007年度に中止となり、HAS も解散となった。創設から閉幕までの経緯については、『紀要2008』「高畠有理子、芹澤沙弥佳(2009). HAS 看護学生弁論大会の軌跡－「創める」ことの意義－. 聖路加看護大学紀要. 35. 76-85.」に詳しい。

５）災害支援

本年度は、支援ボランティア募集の対象となる災害がなかった。

６）アルバイト活動

学生部では、大学に求人のあった学内及び学外のアルバイト・ボランティア活動を紹介している。特にアルバイトは、学業と健康に支障のない範囲をよく考慮し、自ら選択し、決定すること、そして、気持ち良くアルバイトをするには、契約時に労働条件を確認するよう指導している。労働基準法では、使用者は労働者の雇い入れに当たり、労働条件を明示しなければならない（労基法15条）などの情報も提供している。

４．学生相談

１）学生相談

学生が快適に安心して学生生活を送ることができるように、さまざまな問題についての相談の窓口として学生部教員と職員が随時対応している。健康に関することは健康管理担当の保健師が

相談にあたり、学生部の教員や校医と連携をとりながら必要時各カウンセリングや医療機関の情報提供と学生からの希望に応じた紹介を行っている。新入生には入学時にマナーを守って快適な大学生活を送れるように呼びかけるとともに、ストーカーやマルチ商法などの被害にあわないよう、自らの判断力を養うために、通商産業省から借り入れしたビデオを用いて学習を行った。さらに、学生間ハラスメントなどの防止や学生証の紛失などについて自治会や掲示板などを通じて随時注意を呼びかけている。

昨年度に実施した学生相談に関するアンケート調査から、学生相談の充実を求める声が多く寄せられたため、2008年度より「よろず相談事業」を開始し、様々な角度から学生支援の改善と充実を図っていった。よろず相談事業は、2008年５月～７月、10月～２月の毎週火曜日11:00～12:30に２階学生部室にて開催し、本学卒業生の高畠有理子さんが相談員として対応した。小さなことでも気軽に相談できる窓口として開始したが、学生からの相談の中には深刻な相談もあり、抱えていた思いをじっくりと聴くことが多かった。年度末には教員・学生に「よろず相談」に対するアンケートを実施し、取り組みの評価を行った。その結果、開催時間や場所の再検討、相談方法の多様化、学生・教員に対する具体的な広報活動等についての意見を得た。次年度はこれらの課題を再検討して、学生のニーズに対応した相談体制の充実を図っていきたい。

５．奨学金

本学で扱う主な奨学金を**表１**に示す。その他に経済的援助が必要な学生に対して、**表２**に示すような奨学金制度の適用ができるよう支援している。

日本学生支援機構の奨学金について、今年度は定期採用で学部１年次内示数第一種５名、２年次以上は第一種１名、１・２年次以上第二種12名の募集があった。学内選考の際、適格者であっても推薦されなかった者を日本学生支援機構へ報告することによって得られる追加採用制度の募集は、今年度はなかった。

給付奨学金では新たに「聖路加同窓会奨学金」が創設された。これは、聖路加同窓会より寄贈された資金により、対象は「本学学生で、将来母校を大切にし、看護を通じて、社会に貢献したいと学業に励む志を持つ者」とされる。学部生からの申請はなかった。

「高島君子記念看護奨学基金」について昨年度応募がなかったが、今年度、学生部長による作文の相談・指導を受け付けたことにより、２名の申請があり採用に至った。

奨学生採用に関しては情報の周知徹底を図るために、募集情報が届いた場合には即時掲示を行っている。応募者個々にそれぞれの奨学金の特徴や申請条件および書類の書式などを説明後、応募者各自が学生課に申請書類を提出する。必要時、学生部長が面接を行っている。申請後は、書類と面接結果などに基づき奨学生選考委員会で推薦順位を決定し申請している。

奨学金全体についての説明会を毎年４月に実施しており、学部生約100名が参加している。終了後に個別に相談に応じているが編入生の相談が多い。

また、返還についての説明会を12月に奨学金ごとに実施している。とくに日本学生支援機構は卒業生の奨学金返還率が在校生の内示数に反映され、また、聖路加看護学園貸与奨学金についても、返還率が在校生の貸与へ影響するので、いずれも規程通り返還するよう強く指導している。

表１　主な奨学金

名　　称	対　象	貸　与　月　額	
日本学生支援機構	学　部	第一種／定額型	第二種／選択型
		自宅外 64,000円 自　宅 54,000円	30,000円、50,000円、80,000円、100,000円 120,000円から選択
東京都看護師等修学資金	学　部	第一種　36,000円　　第二種 一口25,000円（二口まで）	
聖路加看護学園貸与奨学金	学　部	30,000円＊緊急採用奨学金（学納金の額を限度とする）	
小澤道子記念奨学金	学部３年以上	1,200,000円（年額）	

表２　2008年度奨学生採用状況

奨　学　金　の　種　類	配　布	申　請	採　用
交通遺児育英会	掲示のみ	自己申請	0
あしなが育英会	掲示のみ	自己申請	0
朝鮮奨学会	掲示のみ	自己申請	2
青峰奨学財団奨学生	0	自己申請	0
茂木本家教育基金	9	1	1
石川県奨学生	0	－	－
電通育英会	0	－	－
東京都看護師等修学資金（学部）第１種	10	2	2
東京都看護師等修学資金（学部）第２種		2	2
丸和育英会	16	7	2
高島君子記念看護奨学基金	5	2	2
日本学生支援機構（１年）第２種＜予約＞	－	－	9
日本学生支援機構（１年）第１種	説明会	⑤	5
日本学生支援機構（１年）第２種	説明会	⑫	8
日本学生支援機構（２年上）第２種	説明会		2
日本学生支援機構（２年上）第１種	説明会	①	1
山口県人づくり財団奨学生	0	－	－
川崎市大学奨学生	0	－	－
聖路加看護学園貸与奨学金（学部）	11	5	5
安田記念医学財団奨学生	3	3	0
岡村育英会	14	7	7
守谷育英会	5	0	0
小澤道子記念奨学金	3	0	0
聖路加同窓会奨学金	1	0	0
山田長満奨学金	6	自己申請	0
廣瀬育英会	0	自己申請	0

○は内示数　2009.3.31現在

表３　奨学生内訳表　学生総数477名（学部学生342名・大学院生135名）

学　年	日本学生支援機構			東京都看護師等修学資金	聖路加看護学園貸与奨学金	その他奨学金	計
	一　種	二　種	小　計				
4	5	9	14	1	4	4	23
学編４	1	0	1	0	3	2	6
3	7	13	20	2	2	6	30
学編３	1	4	5	0	2	4	11
2	8	16	24	2	2	5	33
学編２	1	1	2	0	3	1	6
1	5	17	22	3	——	1	26
小　計（学　部）	28	60	88	8	16	23	135
	8 ％	18 ％	26 ％	2％	4％	7％	39％
小　計（大学院）	※23	4	27	11	28	10	76
	17 ％	3 ％	20 ％	8％	21％	7％	56％
総計	51	64	115	19	44	33	211
	11 ％	13 ％	24 ％	4％	9％	7％	44％

※辞退１名　　2009. 3. 31 現在

表４　奨学生受給状況

奨学金の種類／年度	日本学生支援機構	東京都看護師等修学資金	東京都育英資金	聖路加看護学園貸与奨学金	その他奨学金	受給総数／全学生数	受給率（%）
1989（H1）	41	11	7	11	6	76／280	27
1990（H2）	47	24	8	13	7	99／280	35
1991（H3）	48	27	6	14	7	102／284	36
1992（H4）	*1 56	43	8	15	13	135／289	47
1993（H5）	58	*2 62	7	17	18	162／295	55
1994（H6）	*3 65	67	7	17	17	173／301	57
1995（H7）	*4 75	79	11	20	14	199／311	64
1996（H8）	*5 63	90	11	20	8	192／340	56
1997（H9）	*6 64	104	10	23	6	207／361	57
1998(H10)	*7 61	101	5	26	10	203／358	56
1999(H11)	*8 73	89	2	30	15	209／382	55
2000(H12)	*9 80	*10 67	2	42	21	212／397	53
2001(H13)	*11 67	46	1	40	24	178／382	46
2002(H14)	*12 64	*13 35	1	*14 41	25	166／386	43
2003(H15)	*15 84	*16 25	1	*17 39	26	175／402	44
2004(H16)	*18 92	*19 18	—	35	25	170／428	40
2005(H17)	*20 101	*21 7	—	34	25	167／455	37
2006(H18)	*22 112	*23 10	—	41	26	189／476	40
2007(H19)	*24 111	13	—	40	29	193／480	40
2008(H20)	*25 115	19	—	44	33	211／477	44

2009. 3. 31 現在

表４　脚注

＊１　1992年より看護に関して特別枠により増加

＊２　1993年度　補欠繰上げ採用あり

＊３　２年次以上で追加推薦２名(編３)

…内示数の外、阪神大震災による特別(災害)採用１名(３年生)

＊４　応急採用　２名（２種１名、１種２種併用１名)、

阪神大震災による特別(災害)採用２名（２種１名、１種２種併用１名)

＊５　１種２種併用　２名

＊６　１種２種併用　２名

＊７　１種２種併用　１名，移行(２種→１種)　３名，補欠(２種)　３名，内示数外１種１名

＊８　１種きぼう21プラン併用１名，移行(きぼう21プラン→１種)１名

＊９　移行(きぼう21プラン→１種)１名

＊10　制度改正

＊11　併用貸与１名

＊12　併用貸与１名、緊急貸与２名、緊急応急併用貸与１名

＊13　２口貸与２名

＊14　緊急貸与１名

＊15　併用貸与２名、緊急貸与２名、緊急応急併用貸与１名、予約採用４名、期中辞退２名

＊16　２口貸与１名

＊17　緊急貸与１名、期中辞退１名

＊18　予約採用２名、期中辞退３名

＊19　期中辞退１名

＊20　期中辞退２名

＊21　期中辞退１名

＊22　予約採用５名、追加採用４名、緊急貸与１名、期中辞退者３名

＊23　２口貸与１名

＊24　期中辞退者５名

＊25　期中辞退者１名

６．福利厚生

１）学外施設

⑴　鎌倉アリスの家

鎌倉市稲村ガ崎にセミナーハウス「鎌倉アリスの家」があり、学生の実習、研修、グループ活動に利用している。

学生は都心を離れた風光明媚な場所での集いを楽しんでいると述べており、毎月のように定期的に利用するグループもある。利用の時期は夏季・９月、休暇の12月・１月、そして卒業期の３月に集中している。

⑵　大井テニスコート

埼玉県ふじみ野市大井にテニスコート２面およびコートハウス１棟がある。

⑶　大井ターゲットバードゴルフ場

テニスコートと敷地内にターゲットバードゴルフ場がある。体育Ｉの授業に使用している。

⑷　スポーツクラブ「オアシス」

聖路加国際病院に隣接する聖路加ガーデン地階にあるスポーツクラブ（東京近郊にある他の支店も利用可）で、25ｍプール、マシンジム、レッスンスタジオ（エアロビクス等）を利用できる。大学が、施設を経営する東急スポーツオアシスと法人年間契約を結び、学生（教職員も利用可）は、学生課窓口で利用券を受け取り、施設受付で520円支払って利用するシステムである。例年、契約更新時期が近づく５、６月頃には利用券の残余が不足していたため、今年度から利用券枚数を増加する契約をした。年間利用者数は次表のとおりである。

表５　オアシス利用者数　　（延べ人数）

年　　度	利 用 者 数
2002	121
2003	357
2004	426
2005	259
2006	586
2007	596
2008	494

⑸　清泉寮

山梨県北杜市高根町清里高原に(財)キープ協会が所有する清泉寮があり、本学学生教職員は通常正規料金の10％割引で利用できる。

2002年度からは体育Ⅱの野外活動実習が行われており、また今年度からは新入生のオリエンテーションセミナーが行われた。

２）学生食堂

本館２階の学生ラウンジは昼休み時には外部委託による学生食堂となる。

学生は月曜日から金曜日、午前11時30分～午後1時の間利用できる。

昼食として、定食470円（２種類)、カレーセット350円、小鉢80円（４～５種類）から選ぶことができる。デザートは果物、プリン、ゼリー等を日替わりで提供している。

３）自動販売機

本館２階ラウンジに自動販売機４台（飲料２台、パン・食品・デザート等２台)、２号館３階に１台（飲料）を設置している。

４）アパート・学生会館等の案内

新入生に対し、合格発表時にアパート・学生会館・不動産業者等のリストを作成し、配布している。在校生に対しては２階学生部室に案内書類等を置き対応している。

５）各種申請・届出

学生課窓口に以下の申請・届出用紙を備え、受理している。

・学内団体結成・更新・解散届　　・印刷物配布寄付募集届
・講師招へい届　　・対外活動届
・学外団体加入届　　・合宿届
・学内集会届　　・調査研究申請書
・紛失・盗難届　　・海外渡航届

6）日本看護学校協議会共済会共済制度「WILL」

「WILL」は看護学生の傷害・賠償責任・感染事故に対応できる補償制度であり、学部学生は入学時に全員が加入する。また、病棟実習に出る教員についても加入している。2008 年度は 8 件の適用があった。

7．健康管理

1）年間業務内容

休養室を備えた健康管理室は、専任保健師１名が中心となって、校医、学生部の教職員や各学年の学生保健委員と共に学生の心身の健康保持・増進を進めている。本年度は健康に関する学生支援充実のため、非常勤保健師を授業期間中に雇用し、健康管理室の運用を実施した。

本年度も昨年度に引き続き、機能的で利用しやすい健康管理室を目指し、特に心身の健康相談の充実を計るため、①健康相談予約制の継続、②校医や他部門との連携の充実、③近隣の精神科医、心療内科医、内科医らとの連携、④ライフ･プランニング・センター臨床心理相談室カウンセラーによる学内カウンセリングの実施に加えて、⑤後期にメンタル・ハラスメントを中心とした健康状態調査票の記入を開始した。これらを組み合わせて活用しながら、年間を通して学生への対応を行っている。

年間業務として、健康管理室が行っているものは下記のとおりである。

⑴　入学時の健康管理オリエンテーション

入学時の健康管理オリエンテーションでは健康管理室の利用方法、健康診断の日程などの連絡、カウンセラーの紹介、カウンセリングの利用方法などの説明を行っている。オリエンテーションでの身体的調査とあわせて心の健康に関して交流分析のエゴグラムテストを行い、その後の保健師との個別面接の際に結果を説明し、入学時の不安や生活面、身体面の問題をあわせて相談にあたっている。また、学生がセルフケア能力を向上する手段として、自身の健康状態を管理できる健康手帳を配布している。この健康手帳では、タバコの害・アルコール・STD などについての知識も提供している。

⑵　定期健康診断

定期健康診断は４月～６月に行っている。聖路加国際病院予防医療センターと連携しながらスケジュールを組んでいる。学生保健委員による学生への日程の周知などの情報伝達を行っている。この健康診断後には、学生全員に対して校医と保健師との面談･内科健診を行っている。この健診でも学生からの心身の相談ができる機会となっている。全学生に健診結果を通知し、再検査や受診などの相談に応じている。

⑶　海外旅行中の健康管理方法の知識の普及

近年、国際看護の総合実習や長期休暇の間に国際ボランティアへ参加するためにアジアの途上国を訪れる学生が増えている。帰国後の病院実習などに影響がないように相談に対応し、知識の普及・予防接種の推奨を日頃から行っている。夏季休暇直前には、全学生を対象に日本渡航医学会評議員佐藤菜保子氏（本学卒業生）を招き、旅行中の注意点などの講習を実施した。

⑷　Ｂ型肝炎予防接種

今年度より、実習中の感染のリスクや医療職としての感染のリスクから身を守るためにＢ型肝炎予防接種の推奨を大学から行うこととした。対象は全学生であるが、今年度はワクチン製造管理に不備があった製薬会社がワクチン自主回収を行ったため、在庫が少なくなり大学院助産課程の院生と学部４年生が優先的に接種した（今年度は大学院生７名、４年生20名、学士４年生１名が接種した）。

⑸　インフルエンザ予防接種

今年度も昨年と同様にインフルエンザ予防接種を実習中の学生のみならずすべての学生に接種を推奨した。校医によりインフルエンザ予防接種が新型インフルエンザに効果を示す場合もあるとの連絡を受け、学生・教職員の接種を促した。今年度は高尾クリニックにて学生277名、教職員43名が接種している。

⑹　後期健康状態調査票の実施

来室する機会が少ない大学院生や学部生の生活状況・日常生活の中での不安や問題などを把握して適切な支援を行うため、今年度より後期健康状態調査票を実施した。これにより、学生の身体およびメンタル面の健康状態を把握でき、学生の求めている医療機関やカウンセリングを紹介することにつながった。

⑺　新型インフルエンザ対策

大流行が危険視されている「H5N1型鳥インフルエンザ」に対する学園における対策として、学生および教職員が正しい知識と危機意識を共有し、感染予防と事前準備を普段から行えるように教育することが健康管理室の役割である。そこで、「聖路加看護大学新型インフルエンザ（H5N1）対策行動計画（案）」を作成した。また、新型インフルエンザに対する正しい知識の普及のために、2009年２月23日に中央区保健所の東海林文夫所長を講師として「新型インフルエンザの問題と対策」を講演していただき、68名の学生および教職員が参加し、情報を得た。その後、学生部と健康管理室が協力して、リーフレット「新型インフルエンザに備える」を作成し、新型インフルエンザの正しい知識の普及を計画した。次年度も引き続き新型インフルエンザに対する大学全体の対応システムの整備を検討し、リーフレットを再度見直すこととなった。

２）2008年度定期健康診断の結果

⑴　健康診断で実施項目と対象者

健康診断で実施している項目ごとの対象学年及び対象者については**表６**のとおりである。

昨年度より、感染症対策として、新入生全員に実習前に獲得すべき免疫、麻疹、水痘、ムンプス、風疹の抗体検査を行い、免疫獲得できていない者に対しては予防接種を勧奨した。

表６　健康診断実施項目と対象者

項　　目	新 入 生	学部2年以上	学士3年以上	助産課程選択者	大学院新入生	大学院2年以上
一　般　検　尿	○	○	○	○	○	○
身　体　測　定	○	○	○	○	○	○
血　圧　測　定	○	○	○	○	○	○
Ｃ　Ｂ　Ｃ　血　液　検　査	○	○	○	○	○	○
ＨＢ・ＨＣ抗原抗体検査	○	○	○	○	○	○
麻疹･水痘･ﾑﾝﾌﾟｽ･風疹抗体検査	○					
ツ ベ ル ク リ ン 判 定 検 査	○	陰性者	陰性者	○	○	陰性者
胸 部 レ ン ト ゲ ン 検 査	○	○	○	○	○	○
内　科　健　診	○	○	○	○	○	○

⑵　項目別受診者数

内科健診、一般検尿の受診者は、該当対象者（大学院社会人を除く）全員である（**表７**）。内科健診には、校医の古川恵一医師のご尽力によって、授業スケジュールにあわせて実施することが実現した。ツベルクリン判定検査は、新入生全員と助産課程選択者、前年度判定結果「陰性」者に継続的に実施している。

⑶　一般検尿、CBC、HB･HC 血液検査、ツベルクリン判定検査、胸部レントゲン検査

有所見者は尿検査：26名（うち院生４名）、CBC検査：11名（うち院生４名）、胸部レントゲン検査は全員正常範囲であった。

⑷　健康診断後のフォロー

健康状態調査と検診時の検査結果により、外来受診を助言した者は、内科27名（うち院生５名）、皮膚科13名、婦人科12名（うち院生２名）、整形外科４名、精神科及びカウンセリングが９名（うち院生２名）であった。

表７　項目別受診者数

対象学年	１年	２年	３年	４年	編入2年	編入3年	編入4年	修士1年	修士2年以上	博士1年	博士2年以上	合計
（人数） 項　目	(72#)	(68)	(71)	(69)	(21#)	(22#)	(19)	(42*)	(43**)	(13)	(37)	(477)
内　科　健　診	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
一　般　検　尿	71	66	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
Ｃ Ｂ Ｃ　検　査	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
HB/HC 血液検査	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
麻疹･水痘･ﾑﾝﾌﾟｽ･風疹抗体検査	71				20							169
ツベルクリン判定検査	71	3	1		20			34		11		142
胸部レントゲン検査	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418

＃うち１名休学中　　*うち８名社会人入学　**うち11名社会人入学

３）聖路加国際病院受診状況

聖路加国際病院受診者数は66名で、受診状況は感染症内科（校医）（34件）、WIC（９件）、皮膚科（８件）、整形外科（６件）、女性診療部（３件）、内科（２件）、呼吸器内科（１件）、口腔外科（１件）、眼科（１件）、耳鼻科（１件）であった。学年別の受診状況は、３年生が最も多く、

ついで１年生、２年生の順である。月間でみると、10、11月に受診者数が最も多くなっている。このことより、実習中に体調不良を訴える学生、感染性の疾患の心配から校医の受診を必要とする学生が多いことがわかる。また、聖路加国際病院の受診を希望する場合には、校医の受診を経てからの紹介受診となるため年間を通して校医の利用が非常に高いと考えられる。校医の受診が困難な場合や緊急度の低い場合には、近隣の婦人科・眼科・内科・心療内科などの紹介もしている。

表８　各診療科の受診者数　（人）

診療科	校　医	WIC	皮膚科	女性診療部	整形外科	内　科	口腔外科	呼吸器内科	眼　科	耳鼻科
人数	34	9	8	3	6	2	1	1	1	1

※校医を受診している割合が非常に多いことが特徴としてあげられる。

表９　各学年及び教職員の受診者数

学年	1	2	3	4	学士２	学士３	学士４	修士	博士	教職員
人 数	13	8	14	8	4	2	0	5	5	7

表 10　各月の受診者数　（人）

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
人 数	6	2	3	1	1	9	10	13	5	5	5	5

４）免疫獲得状況について

予防接種の抗体検査結果で抗体が不十分だった人数は下記のとおりである。新入生に対して抗体検査を実施した。本年度までは２年生の「援助論Ⅳ実習」までに免疫を獲得しておくことになっている。しかし、来年度より１年前期の病棟見学実習までに免疫を獲得できるように予防接種を済ませることを徹底する。新入生の抗体検査結果を見ると、全国で免疫のないことが問題となっている麻疹よりも、本学では、ムンプスの免疫が獲得されていないことに注意をしていく必要がある。

表 11　免疫獲得不十分者数とその割合

学　　年	水痘（人）	(%)	麻疹（人）	(%)	風疹（人）	(%)	ムンプス（人）	(%)
1 年生	4	(6.0)	26	(36.6)	5	(7.0)	40	(56.3)
学士 12 回	0	(0)	3	(15.0)	3	(15.0)	10	(50.0)

５）たばこ喫煙の実態について

健康状態調査票に記載されたデータを以下に示す。喫煙しているという回答は24名であった。この結果は昨年度と同様である。今後は、入学時から禁煙教育を行う必要性があると考えている。

表12　各学年のたばこ喫煙者数　（人）

学　年	1年	2年	3年	4年
人　数	4	2	11	7

6）健康管理室利用状況

健康管理室で行われた相談・処置の状況は、全数750件であり、**表13**に示した。健康管理室の利用は、特に４、５、６、７月、そして 9、10、１月に多い。これは、健康相談件数が多い時期と重なってくる。４、５月は新学期の始まりの時期、６、７月は定期健診の相談、9、10、１月は３年生の実習による心身の不調・予防接種に関する相談というように、時期によってそれぞれの理由で利用が増えていると考えられる。利用者数は、３年生が最も多く、次いで１年、２年、４年、院生の順である。クラス人数の割合からすると、３年生の利用件数（217件/71人）の割合が多い。健康相談件数も３年が最も多く、１年、２年、４年の順である。１年は４、５月、２年は４月と６月、３年は４月から７月までと実習が始まる９月、４年生は10月の学業・進路の相談件数が多い。相談者の多くは、くり返しやってくる特定の学生である。

相談内容を分類すると、身体面・精神面・人間関係・学業面の順で、学生生活と深く関係し、複合された問題を抱えていた。特に、サークルやアルバイトと学業の両立のための多忙による身体的負担や家族、友人との人間関係によるストレスを訴える学生が多い。傾向としては、体調不良の訴えから日常生活の話、精神的ストレスなどの相談に話が展開していくことが多い。

身体の不調に関する利用は『胃・腹痛』『風邪』『外傷』『月経痛』『頭痛』の順になっている。したがって、胃薬・総合感冒薬・鎮痛薬の使用量が多く、昨年度と同様の傾向である。症状によっては、校医や近医を紹介している。

表14、15からも明らかなように、健康管理室の利用数は精神面に関する悩みによる利用数と比例しており、カウンセラーや校医との連携を含めたメンタルケアが重要となっている。身体面のみならず、精神面に関する悩み、様々な不安を抱える学生が、社会資源を活用しながら自身の心身のケアを卒業後も継続的に実行できるようにサポートをしていく必要が再確認された。

7）健康相談予約制の継続

学生からの相談には、いつでも開かれている健康管理室を原則としてきているが、学生が相談のため健康管理室を訪れた際、他の学生が利用している場合もあるので、メールによる予約制を導入し、相談時間をしっかりとれるようになり、相談が非常に充実するようになった。申込み方法は、事前にメールで名前・学生番号・希望予約時間を連絡し、予約の確認を返信した。相談時間の目安は30分とし、予約の状況によっては時間を延長できる。また、次回の相談日時を約束して､継続相談も可能である。相談場所はカウンセリング室で行い、予約は学生の授業時間にあわせてとれるようになっている。また、一昨年度より専門カウンセラー福井みどり氏による学内カウンセリングがスタートし、カウンセリングを受けるに当たっての事前相談を希望する学生も増加している。

表13　健康管理室利用状況（2008年度）

	頭痛								胃・腹痛								月経痛								かぜ								外傷								相談								その他								小計								合計
	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	
4月		1		2						1	1						3		2	1				1	2		2	1					3	1		1					14	10	11	4	2	0	1	3	9	9	3	4				1	30	22	19	13	2	0	1	5	92
5月	1		2		1	1		1	4		2	1					1	1	1						7	3	1	1				1	2	1		2	1	1		1	18	3	15	4	2	0	0	2	7	3	4	2					40	11	25	10	4	2	0	5	97
6月	2		4	2					1	2		5					3	1	1	1					1	2	2	1					1	2		1					4	8	12	1	1	2	1	0	9	9	14	1				2	21	30	33	12	1	2	1	2	102
7月	5		4						4		5	1						1	1														1	8		1					15	6	13	4	1	0	0	4	15	15	10					1	42	22	37	5	1	0	0	5	112
8月																	1	1	1	1				1									3		4						0	0	5	2	1	0	0	0			1	2				2	1	2	6	5	1	0	0	5	20
9月	1	1	2						1	1	2			1				2	1							2								2						2	3	0	16	5	0	1	0	5		1	6	1		1		1	6	6	29	7	0	3	0	6	57
10月		0	1						2		1	2	1				2		1	1	1				3	4	1		1				1	1		1					3	2	4	12	2	0	1	4	6		5	2				1	18	7	14	21	5	0	1	6	72
11月			2	1					4		2	2	1			1	1	4	1						2	2	1						2	1	1	4				1	1	4	2	1	1	1	0	1	1		1		2	1		1	10	10	9	4	5	2	0	2	42
12月	1	1	1	1				1	1		2						1	1	3						2								1			1	1				1	0	4	3	0	1	0	1	3	2	2			1			9	6	12	4	1	2	0	2	36
1月			2						1	3	1						3		1						3	4	1							2			1				6	4	4	2	0	4	1	5	3	2	9	1			1	3	18	14	18	3	0	4	2	8	65
2月	3		1			1			1			1				1	1	2	1						1			2		1				1							1	3	6	0	2	0	1	3	2	1	2				1		9	6	12	1	2	2	2	4	38
3月									1			1																													3	0	1	2	1	0	0	2			2	2			1	1	4	0	3	5	1	0	1	3	17
小計	13	3	19	5	1	2	0	2	20	7	16	13	2	1	0	1	16	12	13	4	10	0	0	2	20	15	12	3	1	1	0	1	13	17	5	10	3	1	0	4	69	40	93	40	13	9	5	30	50	42	95	15	2	3	3	13	206	136	217	90	23	17	8	53	
計	45								60								48								53								53								299								192																750

８）後期メンタル健康状態調査票の実施

2008年度の後期は、全学生を対象にメンタル健康状態調査を実施した（**表14**）。調査の目的は、来室する機会が少ない大学院生や学部生の生活状況・日常生活の中での不安や問題などを把握して適切な支援を行うためである。質問項目は「Ⅰ.日常生活」「Ⅱ.メンタルヘルス」「Ⅲ.周りの人などからのハラスメント（DV・アカデミックハラスメントを含む）」「Ⅳ.月経・月経関連症状」「Ⅴ.自由記入欄」という５つに分けて記名式で実施した。「Ⅰ.日常生活の項目」では、運動・食事・睡眠・体調・飲酒・喫煙についての13の質問に３件法によって回答を得た。「Ⅱ.メンタルヘルス」の項目はSDSより抽出した10項目の質問を行った。「Ⅲ.周りの人などからのハラスメント」では身体的・性的・言葉・心理の４項目について、過去・現在・知人が受けている、の３段階で回答を得た。「Ⅳ.月経関連症状」では、月経の規則性・間隔・月経関連症状の有無・月経関連症状の対処法について尋ねた。

全学生477名のうち、回答は375名（回答率78.6％）であった。そのうち、各項目にて下記に該当する学生には心身の状態について個別に聞く必要があると考え、面談またはメールで相談に応じ、その場で解決することもあったが、場合によっては校医または嘱託カウンセラーとの連携によって、適切な医療または専門家による心理的対応につなげた。

⑴　気がかりな回答のあった学生

回答者のうち、①日常生活について体感しているストレスと発散とのバランスが取れていない学生、②３項目以上の生活の問題点があり、SDSを参考にした質問項目からメンタルヘルスに注意が必要と判断した学生、③ハラスメントを受けた・受けているという記載のある学生、④婦人科系の問題やその他の相談で受診やカウンセリングを希望する学生について、心身の状態を個別に聞く必要があるとし、メールなどで連絡した（**表15**）。

表14　学年別メンタル健康状態調査結果

学年	回答者数	ストレス アンバランス	受診 カウンセリング必要	ハラスメント 受けた	ハラスメント 現在受けている	メンタルヘルス 要注意
１年	(57)	25	3	13	2	10
２年	(66)	10	11	7	3	8
３年	(62)	23	6	15	1	5
４年	(63)	12	17	14	1	9
学士２年	(21)	5	2	3	0	2
学士３年	(19)	8	0	4	0	5
学士４年	(15)	5	1	5	0	2
修士１年	(31)	16	12	5	1	11
修士２年	(26)	12	9	6	2	9
修士３年	(2)	1	1	0	1	1
博士	(13)	3	0	1	1	2
合　　計	375	120	62	61	12	64

体感しているストレスと発散できているストレスのバランスが取れていない学生は120名（回答者の32.0%）。３項目以上の生活の問題点があり、SDS を参考にした質問表からメンタルヘルスに注意が必要と判断した学生は64名（回答者の17.1%）、ハラスメントを受けたという記載のある学生は61名（回答者の16.3%）、現在も受けている学生は12名。婦人科系の問題やその他の相談で受診やカウンセリングを希望する学生は62名（回答者の16.5%）。

⑵　後期健康状態調査票結果に対する対応

ストレスのバランスやメンタルヘルスについて、学生からは実習期間中・卒業論文・修士論文・研究によるものという一時的なものが多く、保健師との面談で解消されることが多いが、慢性的な訴えの学生についてはカウンセリングを勧めた。ハラスメントを受けた学生については既に解消されている学生も多いが、現在も受けているという学生については相談を促しても来室しないケースが多い。受診やカウンセリングを希望する学生にはメールにてクリニックや病院を紹介しているが、不安が聞かれる学生には事前に相談を実施した。

ストレス発散がうまくできない学生には本年度から看護実践研究センターで小口江美子教授が開催したストレスマネジメント・ヨガクラスを紹介し、１年生１名、２年生２名、４年生２名、大学院生２名が参加した。参加した学生全員がストレス発散につながったと感想を述べていた。

連絡した全学生のうち受診先（校医・婦人科など）やカウンセリングの紹介をメールで行ったのは180名。メール・メモ掲示後に保健師と個別に面談した学生は42名。平均面接時間21分。面接での内容は、調査票に記載されていた体調・メンタル・ハラスメントについてである。メール・メモの掲示後に、学生からのメールによる相談・来室につながった学生は18名である。身体的相談（婦人科・整形外科など）について、具体的なクリニックの名前などをメールに記載して受診を促した学生は57名である。「健康管理室からのメール連絡により受診した」と申告してきた学生は18名に至る。

表15　学年別メンタル健康状態対応状況

学　年	回答者数	個別メール返信数	保健師面談	面談時間平均（分）	メールにて身体的受診紹介	受診につながる（本人の申告より）
１年	57	31	7	27.8	10	3
２年	66	26	7	15.7	7	3
３年	62	31	9	18.9	9	1
４年	63	31	12	19.2	12	9
学士２年	21	7	0	0	4	0
学士３年	19	8	1	27	0	0
学士４年	15	7	3	31.7	2	1
修士	31	16	1	15	7	0
修士２年	26	19	0	0	6	1
修士３年	2	2	1	10	0	0
博士	13	2	1	15	0	0

この調査後の個別メール配信により、健康管理室の利用率が少ない大学院生の様子の把握ができ、学生が抱える問題の解決へつなげるきっかけをつくることができた。学生からは「国家試験前や実習中のメールは励ましになった」「メールがもらえて嬉しかった」という意見が聞かれた。健康管理室の存在を身近に感じてもらえ、個々の学生との距離がいっそう縮まったようである。また、健康管理室から学生全員にメールを配信することで、健康管理室へのアクセスは来室のみならずメールでも可能であることが周知された。これにより、学生からのメールによる問い合わせ・メモのようなショートメッセージなどが増え、学生のための健康管理室の利便性が高くなったと考える。また、健康管理室としても学生と関わる方法が増えたため、受診やカウンセリングなどのサポートにつなげやすくなったと考えられる。個人面接に20分の時間を費やし、留学生を含む500名近くの学生への対応、また、後期の同時期におけるインフルエンザ予防接種の予約約300名の学生への対応について、本年度は非常勤保健師による対応のサポートによって実施することができた。次年度以降の課題としては、メール添付して回答した大学院生への質問項目の記入方法の簡易化、質問項目の明確化、返信の迅速化が求められる。

9）校医、他部門との連携

⑴　校医との連携

現在、感染症や身体的な緊急時対応は、適確に行われている。定期健康診断時、校医による内科健診が学部学生全員に行われるため、気になる学生や、心や身体の訴えをもつ学生の情報に関して、校医と共有することができ、その後の校医との連携が非常にスムーズに行われている。また、大学内で校医による健康相談の時間があれば学生・教職員の健康維持に望ましいという要望に対し、前向きに考えていきたい意向が校医から示されている。

⑵　聖路加国際病院他部門の連携

学生の医療機関への紹介は、電話や窓口で行われ、聖路加国際病院あるいは近隣の各クリニックへ連絡している。B型肝炎やインフルエンザ、麻疹などの予防接種は健康管理室より近医である高尾クリニックに依頼し、今年度は年間348名の学生が利用している。また、当日外来など聖路加国際病院で受診できない場合などには、眼科では佐久間眼科、婦人科ではほそのレディースクリニックを紹介している。個人の受診の紹介後の経過については、医師から連絡が入る場合もあるが、個人情報であるので、基本的には直接学生本人から健康管理室へ報告するように働きかけている。また、身体面に関する受診の場合は、校医が他部門および他科の医師と医療情報の交換を行っているため、学生へのヘルスサポートが充実している。しかし、精神的な問題に関しては本人のプライバシーの問題もあり、どの学生がどのような相談状況にあるかの把握が難しい。そこで、学生が受診している医療機関の方々との連絡会を年に１～２回開催し、本学の教育へのご理解とご協力をいただく機会を作り、本学と医療機関の連携をスムーズにとれるように図りたい。

10）近隣の精神科医、心療内科医との連携

学生の人間関係などの精神的な問題が深刻化し、充実したメンタルヘルスサポートが必要となってきている。そのため、学生部が作成した、学生向け「こころとからだの健康相談」というパンフレットを新入生健康管理オリエンテーションで配布し、相談方法を具体的にわかるようにした。また、近隣の精神科医、心療内科医として紹介リストにあげたクリニックへは、健康管理室

保健師から学生の現状を説明して学生の理解を深めた後、学生本人または健康管理室から予約の電話を入れるようにした。紹介リストによって、学生のクリニック選択の幅ができ、安心して利用できるという思いから専門医を受診しやすくなったという声が聞かれている。

11）ライフ・プランニング・センター臨床心理相談室専門カウンセラーとの学生相談

学生たちはさまざまな悩みを抱えて、誰かに相談したくなった時、ライフ・プランニング・センター（LPC）臨床心理相談室専門カウンセラーに無料でカウンセリングを受けることができる。2008年度の学生相談利用年間件数は48件（2007年度58件）で、月平均４件となっている（**表16**）。

表 16　カウンセリング回数

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	計
件数	4	5	6	3	3	4	5	7	5	3	1	2	48

LPC の福井みどりカウンセラーからの報告によると、これまで大学から離れた砂防会館でのみ行っていた学生カウンセリングを月２回大学内で実施するようにした結果、これまで相談内容がうつなどの深刻なケースが多かったが、彼氏のことや人間関係など「こんなこと相談しても良いですか」といって気楽にカウンセリングを利用する学生が来室するようになった。また、相談室側では継続してフォローがしやすくなり、フィジカルな面での問題で今まで以上に健康管理室や校医との連携がとりやすくなったと感じている。カウンセリングが自殺やうつなど深刻な問題となる前の予防あるいは前兆の把握として役に立てれば良いと考えている。

2008年度の学生の相談内容は昨年と同様、①実習でのこと、②家族や彼氏との関係も含めた対人関係のトラブル、③個人の性格に起因すること、④うつなど気分障害を呈していることなどであるが、性に対する悩みも多くあることがわかり、デート、DV の問題など、健康管理室と協力して学生の心身の保健対策に協力をしていきたいと述べている。

12）本学学生の喫煙行動の実態および関連要因について

大学生は、未成年から成年となり、法的に喫煙が認められる年齢に至るなど環境の変化が多い時期である。国民の健康を担う専門職を育成する大学として、本学看護学生がどのような要因によって喫煙を開始するのか、看護大学生はどのような禁煙教育によって禁煙することが可能なのか、喫煙の実態を把握する必要性があると考えられた。その実態調査結果から、看護大学における健康管理室としての防煙・禁煙対策を検討した。

⑴　対象と方法

本学に2007年度在籍していた学部生345名中、研究への参加に同意した128名を対象とし、無記名による自記式アンケート調査を2008年１月下旬に実施した。

⑵　結果

①アンケートに回答した本学の喫煙経験者は42名（32.8％）、喫煙未経験者は86名（67.2％）であった。

②禁煙教育が印象づけられている時期は、喫煙経験者では、小学生19.0％、中学生35.7％、高校生33.3％、大学生35.7％、未経験者では、小学生32.6％、中学生65.1％、高校生37.2％、大学生24.4％となっており、禁煙教育が学生に最も印象づけられているのは中学生時代であることがわかった。

③喫煙による健康被害を授業で学んだと答えた者が喫煙経験者90.5%、未喫煙者では96.5%、喫煙者自身や他者への影響を認識している者は、喫煙経験者も未経験者もともに100%であった。また、喫煙と様々な疾患との関連についての正解率は、未喫煙者と比較して喫煙経験者のほうが高かった。この対象では、タバコの知識は禁煙とはつながっていなかった。

④喫煙経験者の「喫煙のきっかけ」は、「友人の影響（50.0%）」「好奇心（38.1%）」であった。タバコは害であるという知識を持つ者が喫煙する理由は、今回の結果より「友人の影響」「好奇心」が最も多く、学生の喫煙のきっかけとなっていることがわかる。したがって、友人同士の影響・好奇心に対して、大学が何らかの働きかけを行うことが有効と考えられる。

⑶　まとめ

①禁煙の知識を小学生・中学生時代に得た者は、喫煙するリスクが低かった。したがって、早い時期での喫煙に関する教育が有効だと考えられる。

②大学生の年代になると禁煙に対する知識の有無より、他者との関係が大きく影響しており、ピアグループなどの相互の影響力や集団の力を利用した禁煙を促す方法が有効であると推察された。

8．チャペルアワー委員会

主な委員会活動は、週３回のチャペルアワーの担当・運営、自治会や聖歌隊と連携しながらのクリスマスの集いの準備・運営、クリスマスツリーの飾りつけ、聖路加国際病院礼拝堂クリスマスイブ礼拝でのプロセッション参加学生との連絡調整ならびに準備などであった。また、昨年度より開始した企画として、新入生にチャペルに親しんでもらおうというねらいから、今年度も引き続き新入生学内オリエンテーションのなかで模擬チャペルアワーを開催した。

毎週水曜日のチャペルアワーは、聖路加国際病院の礼拝堂で、学生の司会により開催されている。今年度から基本的に第３水曜日は「お話会」と題して、学内や聖路加にかかわりのある先生方をお呼びして、お話をしていただく会を実施した。今年度は、上田憲明主任チャプレン、ケビン・シーバーチャプレン、中村めぐみ氏（聖路加国際病院）、押川真喜子氏（聖路加国際病院・訪問看護ステーション）、八木正言氏（立教大学チャプレン）の「お話会」を行った。話していただくテーマは、学生自身が考え、講師依頼や当日の運営なども学生が主体となって行った。第１、２、４水曜日は、新約聖書を読み進め、またオルガニストのご協力を得て、聖歌を共に歌う機会をもった。月曜日・金曜日は、学生の参加が少ないことや10分という短い時間ということをかんがみ、今年度は本学の310教室で、「デイリーブレッド」（RBC ミニストリーズ）を読み進めた。これらを読み進めながら自分の生活を振り返り、上田憲明主任チャプレンやケビン・シーバーチャプレン、友人や教員と感じたこと、考えたことを共有しながら、神の御心を問う貴重な時と場となっている。

しかしながら、チャペルアワーへの毎回の参加人数も数人程度であり、特に後期は実習などの関係で、参加人数が少なくなっている。礼拝堂で心の声に耳を傾け、本学の理念を振り返るチャペルアワーと、学業を両立するためには、引き続きチャペルアワーの意味を考えていくことを求められていると思われる。

聖路加国際病院礼拝堂クリスマスイブ礼拝のプロセッションには、21名の学生が参加した。昨年同様に参加学生はチャペルアワーの時間に、上田主任チャプレン、シーバーチャプレンよりクリス

マス礼拝の意味について学んだ上でプロセッションに臨んだ。

チャペルアワー委員は、委員長をはじめとして主体的に活動し、チャプレンや教員と協働して、チャペルアワーの運営、クリスマスの礼拝等の準備を担っていた。

チャペルアワー開催場所・時間

場　所：聖路加国際病院礼拝堂

時　間：水曜日　12：30～13：00

ミニチャペルアワー開催場所・時間

時　間：月曜日・金曜日　11：50～12：00（本学310教室）

9　オリエンテーション・セミナー

1）セミナーの開催

本学学部入学生を対象として、本学の理念およびカリキュラムへの理解、上級生や教職員との交流、さらに、新入生相互の交流などの促進を目的に、2008年度新入生オリエンテーション・セミナーを、財団法人キープ協会清泉寮において開催した。なお、本セミナーは、多数の上級生ならびに教職員の協力の下に実施されたものである。

日　時：2008年４月12日(土)，13日(日)　１泊２日

場　所：財団法人キープ協会清泉寮（山梨県北杜市高根町清里３５４５）

参加者：新入生90名，上級生ボランティア25名，教員28名

プログラム

４月 12 日(土)	
９：00	大学出発(バスで清里まで移動)
	昼食後
14：00－14：45	キープ協会専務理事講話「ポールラッシュ先生のミッション」（正木　実）
	ポールラッシュ記念センター見学
15：00－17：00	グループワーク「春を探そう、自分を探そう、仲間をつくろう」
17：30－	夕べの祈り（上田　憲明）
18：00－19：00	夕食
19：00－	上級生企画

４月 13 日(日)	
７：10－	朝の祈り（ケビン・シーバー）
７：30－９：00	朝食
９：30－10：30	学長講演「本学の歴史と理念」（井部　俊子）
11：00－12：20	レクリエーション（大濱　あつ子）
	昼食後
14：00－15：15	グループワーク発表会（分かち合い）
15：15－15：45	学部長講演「無駄に見えるもの・無くなればいいと思うこと」（堀内　成子）
16：00－	清泉寮出発（バスで大学まで移動）

2）オリエンテーション・セミナーレポート

新入生オリエンテーション・セミナーに参加した新入生の感想とグループワークの結果をまとめたレポート（冊子）を2008年５月30日付で発行し、新入生および教員に配布した。

3）オリエンテーション・セミナーの評価

⑴　新入生へのアンケート結果について

オリエンテーション・セミナーに参加して、「多くの人と知り合うことができた」「大学の雰囲気がつかめた」と回答した学生の割合は、いずれも90％以上と多く、さらに、セミナーに参加して満足でしたか」「セミナーは必要であると思いますか」のいずれの問いについても、平均4.6点以上の高得点が得られている。「上級生企画」「レクリエーション」「学長・学部長講演」

と、「宿泊すること」への高いニーズとあわせて、新入生たちは、上級生や教員とともに宿泊型のプログラムへの参加を希望していることが顕著にうかがえる。

⑵　教員へのアンケート結果について

「学生が多くの人と知り合えた」「セミナーは必要であると思うか」の問いに対して、いずれも 4.4 点以上の高得点を得ており、教員もオリエンテーション・セミナーの必要性を感じていることがわかる。さらに、本年度から、宿泊施設を清泉寮に変えた点については概ね好評であったが、往復の交通渋滞によるプログラムの変更等を余儀なくされた、土日での開催については改善の要望が寄せられており、これは来年度に向けての課題である。

⑶　上級生へのアンケート結果について

「新入生が多くの人と知り合えた」「新入生は大学のイメージがつかめた」「セミナーは必要であると思うか」の問いに対して、いずれも 4.4 点以上の高得点を得ている。清里のフィールドを散策しながらのグループワークについては、歩きながら話すことは人数が多いために難しく、したがって、通過するポイントの数を減らして、じっくりと話し合う時間をとるほうが効果的であろう、との指摘があった。さらに、土日型の日程では、月曜日が代休とならないため上級生への負担が大きく、したがって、来年度については、日曜日を避けた日程で実施すべきである。

10. 就職･進学に対する支援体制

1）就職情報の提供

募集求人に関する情報提供（求人票および掲示板）

随時大学に集まる求人の資料は、求人票（学生部室内の専用棚に番号を添付しておき、看護師・保健師・助産師と職種別に一覧表にしたもの）および掲示板により学生への情報提供を行った。求人票の利用方法について３年次の就職ガイダンスにおいて学生に説明し、さらに使い方の手順を作成することで、より学生が有効に活用できることを図った。年々、就職関連雑誌の種類が急速に増えていること、求人施設側のインターネットでの情報公開、ホームページ、さらには就職ガイドの WEB サイトなどの就職関連情報網が拡大しつつある。次々に送られてくる就職情報誌は、そのつど学生が入手できるようにした。求人資料の管理については、学生の活用状況と、情報管理に要する作業量を考え、より効率的な方法を再検討した。

2）就職活動をささえる支援

⑴　進路ガイダンス

学生が、就職活動を円滑にまた主体的に行うことができるように、就職ガイダンスの準備と運用を行った。就職ガイダンスでは、国家資格を有する専門職として自身の将来を見据えたキャリアプランを描き、就職に関する情報収集、自己の適性判断、就職先選択、就職試験対策、最終的な内定受理まで、段階を追って各時期に応じ、基本的な姿勢および知識・ルールなどを提供し、主体的に就職活動を行えるようガイドした。

就職ガイダンスは、３年生の後期から４年生の前期にかけて計４回のシリーズで行った。今年度の実績としては、４年生を対象に、前年度から引き続き第３回目（４月）と第４回目（６月）を、また、３年生を対象に第１回（12月）と第２回目（２月）を開催し、毎回の参加者数

は60～70名程度であった。近年の傾向として就職活動や求人が早まっていることを考慮し、より早い時期に学生が主体的に将来のキャリアプランや具体的な就職先について考えることができるように、時期を設定した。

今年度の第１回目就職ガイダンスにおいては、「就職活動ガイドブック（初版2006年11月発行・第３版2008年12月改訂）」を配布するとともに、10年後の自分について考え、キャリアプランを描き始める動機づけを重視した内容とした。就職活動に関する１回目アンケート調査として「10年後の自分について考えたことはあるか？」「自分の就職について考えはじめているか？」「就職ガイダンスに関する具体的要望」などを問う機会を設けた。３年生の学生にとっては、アンケートに回答することにより、就職活動を自分のこととして捉え、具体的に考え始める機会になったと思われる。

第２回就職ガイダンス（２月）は、総合実習のオリエンテーションと同じ日に開催した。４年生の１年間の流れを紹介し、見通しをもって計画的に過ごせるよう情報提供した。加えて、「私の就活・進学スケジュール」として自分で書き込めるスケジュール表を配布した。また、近年大学院への進学者が増加していることを考慮し、大学院に進学した先輩２名から体験談を聞く機会を設けた。

４年生を対象とした第３回就職ガイダンス（４月）では、具体的な就職活動準備として、各種の問題集、自己分析、推薦書の依頼の仕方などの情報を伝えた。第４回就職ガイダンス（６月）では、卒業生７名を招き、就職活動体験談や現在の職場の様子などを語ってもらった。また６施設より就職担当者が来校した。ガイダンスの後半は、卒業生や施設担当者と懇談の時間を設け、詳しい情報収集を行える機会となっていた。今後の予定は下記のとおりである。

＜2008～2009年度＞

３年次12月　さあ、未来の扉を開こう―10年後の自分を想像してみよう！―

３年次２月　就職活動のスケジュールを立てよう！

４年次４月（予定）　就職活動の実際と就職試験の受験対策

４年次６月（予定）　私の就職活動（先輩との交流会）

⑵　個別相談

４年生に対して就職活動の過程で個別の相談を受けた。本年度の個別相談の主なものは、就職先の相談、就職試験の勉強・対処方法、内定を受けた後の辞退の仕方、複数合格し選択する際のアドバイス、就職試験に失敗した学生の支援等であった。同時に複数の内定通知を受け取り、その後の対応として、内定を受けた後の辞退の仕方に悩んで相談に訪れる場合が多くなってきている。

⑶　就職活動ガイドブックの改訂

「就職活動ガイドブック（初版2006年11月発行・第３版2008年12月改訂）」を刷新し、第１回目就職ガイダンスにおいて配布した。ガイドブックの内容は、これまで年間を通して行ってきた「就職ガイダンス」ならびに「個別相談」を参考に、①就職活動を進める上で特に重要と思われ学生部担当教職員から説明を行ってきたこと、②個別相談やアンケート調査の結果から学生が必要としている情報、を含めるようにした。以下、冊子の目次を示す。

＜目次＞

はじめに：学長からの言葉
Ⅰ．さあ、未来への扉をたたこう！：就職するということ、専門職業人として働くこと等について
Ⅱ．自分の人生をデザインする：年間の就職活動スケジュールを図示
Ⅲ．就職活動：情報収集の方法、就職先の絞込み、応募方法、受験対策、内定の受け方
Ⅳ．就職活動支援体制：利用できるリソース（人、物）
Ⅴ．わたしの就職活動体験：先輩からのメッセージ

第３版（改訂版）では、個別相談の内容でも増えている、内定を受けた後の辞退の仕方について、基本姿勢とともに具体的な対処方法について盛り込んだ。また、今後のキャリアプランとして、専門看護師、認定看護師、認定看護管理者などに関する具体的な情報を紹介した。

⑷　就職活動体験記の閲覧ファイル

これまで就職活動の体験記が卒業生から寄せられてきたが、今年度はこれらの資料を一括して綴り、「就職活動体験記」という名前を付けて閲覧ファイルを作成し、学生部室内の棚に常設した。毎年、最新の情報を取り入れ、更に内容を充実させていく予定である。今年度についても、内定が決まる時期に様々な職種や領域に就職を決めた４年生に呼びかけ、就職活動体験記の投稿を募集し、「就職活動体験記ファイル」に加えた。今後も就職活動体験記の投稿を募り、情報を蓄積し、一部は就職活動ガイドブックにも掲載していく予定である。

３）就職状況

学部生の採用資格は、看護師73名、保健師３名、進学その他12名であった(**表17**)。看護師での就職は全体の83％であった。なお、学部での助産師養成課程が終了したことにより、助産師での就職は大学院生のみとなった。

表17　2008年度 学部卒業生進路(就職・進学)状況　　学部卒業生88名（学部生69名、編入生19名）

看護師

聖路加国際病院（37）　虎の門病院（10）　杏林大学医学部附病院（6） 東京大学医学部附属病院（5） 東京大学医科学研究所附属病院（1）　昭和大学病院（1）　昭和大学横浜市北部病院（1） 長谷川病院（1）　神奈川県立こども医療センター（1）　済生会横浜市東部病院（1） 東京武蔵野病院（1）　東邦大学医療センター大森病院（1）　大森赤十字病院（1） 医療法人財団秀行会阿部クリニック（1）　NTT 東日本関東病院（1） 癌研究所有明病院（1） 東京北社会保険病院（1）　横浜市立大学附属市民総合医療センター（1） 地方公務員（東京都松沢病院）（１）	73

保健師

江戸川区（1） 地方公務員（柏市）（1） 東芝ヒューマンアセットサービス株式会社（１）	3

進学

聖路加看護大学大学院（7） 東京医療センター附属東ヶ丘看護助産学校（1） 高崎助産師学院（1） 山形大学養護教諭特別科（1） 岡山大学大学院保健学研究科（1） 日本赤十字大学看護大学大学院（1）	12
計	88 人

【大　学　院】

1．学生部

学生部は、学生が本学の教育目標をいっそう効果的に達成され豊かな大学生活を過ごせるようにその私的・公的生活を支援することを目的としている。2008年度の学生部の担当は、教員６名（うち学生部長１名）と学生課職員２名、健康管理担当保健師１名である。

大学院学生は自立して生計を営む者が多く、そのうち社会人学生は職場での責務を担いながら課程での学びを続けている。大学院、職場、地域、家庭など複数の場における役割を担いながら本学に学ぶ大学院学生に対して、学生部は次の内容に関して情報提供と個別相談支援活動をしている。

- 学生生活を有意義にする情報提供：行事（クリスマスの集い・創立記念・７チャペルアワーなど）、キャンパスマナー（紛失･盗難･拾得物扱い、挨拶、マルチ商法･ストーカーなど自己防衛）、ボランティア、アルバイト、福利厚生など
- 学生生活を支援：奨学金、アルバイト、健康管理、心の相談、保険制度など
- 将来の進路相談：進路相談、就職情報資料提供など
- 調査協力：学内学生対象の調査

2．自治会活動

学生部は大学院学生が運営する自治会を院生の代表窓口としてとらえ、連携を図っている。これまで、学生の学修環境をより良いものにするために、大学院学生自治会が取りまとめた意見が学生部に寄せられている。学生部は、大学院学生の要望内容の確認と、要望内容を取り扱う部署の紹介、また、その伝え方などをアドバイスし、コミュニケーションによる問題解決をめざして調整の役目をとっている。

3．奨学金

本学で扱う主な奨学金を**表18**に示す。その他に経済的援助が必要な学生に対して**表19**に示すような奨学金制度の適用ができるよう支援している。

日本学生支援機構の奨学金について今年度は定期採用で修士１年内示数第一種７名､第二種５名、修士２年第一種１名、博士１年第一種６名、第二種１名の募集があった。

また、平成16年度以降の大学院第一種奨学生採用者対象の｢特に優れた業績による返還免除｣制度については、今年度該当する修了生８名のうち修士４名、博士２名が学内選考委員会へこの適用への申請を行った。その結果、内示数の修士２名、博士１名を日本学生支援機構へ推薦した。

学園奨学金の募集は６月上旬としており、他の奨学金と募集時期をずらすことで奨学金を希望する大学院生に、少しでも多く奨学生となってもらうよう支援している。

給付奨学金では、今年度新たに「青木奨学金」と「聖路加同窓会奨学金」が創設された。「青木奨学金」は、本学卒業生で本学園理事・評議員の青木康子先生から寄贈された資金により創設された給付奨学金制度である。対象は、修士２年次生で将来助産師として実践で活躍する、あるいは助産教育・研究に携わることを目指す人材を対象とし、大学院２年生３名が採用された。今後も毎年３名採用される。「聖路加同窓会奨学金」は、聖路加同窓会より寄贈された資金により創設された制

度である。対象は本学学生で、将来母校を大切にし、看護を通じて、社会に貢献したいと学業に励む志を持つ者とされる。採用者は大学院生１名である。

これまで採用の実績のなかった守谷(もりたに)育英会給付奨学金については、2005年度より応募して以来初めて大学院生１名が採用された。

奨学生採用に関しては募集について随時掲示をしている。応募者に個々の奨学金の特徴や申請条件および書類の書式などを説明後、応募者各自が学生課に申請書類を提出する。必要時、学生部長が面接を行っている。申請後は、書類と面接結果などに基づき奨学生選考委員会で推薦順位を決定し申請している。

また、返還については12月に大学院生個々に提出書類の説明をしている。とくに日本学生支援機構は卒業生の奨学金返還率が在校生の内示数に反映され、また、聖路加看護学園貸与奨学金についても、返還率が在校生の貸与へ影響するので、いずれも規程通り返還するよう強く指導している。

今後も広く大学院生に奨学金制度の存在を理解してもらい、経済的な不安を抱かずに学業に専念できる環境を整えられるように支援していくことが肝要である。

表18　主な奨学金

名　　称	対　　象	貸　　与　　月　　額	
		第一種/定額型	第二種/選択型
日本学生支援機構	大学院（修士）	88,000 円	50,000 円、80,000 円、100,000 円、130,000 円、150,000 円から選択
	大学院（博士）	122,000 円	
東京都看護師等修学資金	大学院（修士）	第一種　83,000 円　　第二種一口 25,000 円（二口まで）	
聖路加看護学園貸与奨学金	大学院（修士）	50,000 円	
	大学院（博士）	100,000 円　（1998 年度より貸与月額改定）	

表19　2008年度奨学生採用状況

奨　学　金　の　種　類	配布	申請	採用
東京都看護師等修学資金（修）　第１種	13	7	5
東京都看護師等修学資金（修）　第２種		1	1
日本学生支援機構(修１年)第１種	27	⑦	7
日本学生支援機構(修１年)第２種		⑤	3
日本学生支援機構(修２年)第１種		①	1
日本学生支援機構(博１年)第１種		⑥	1
日本学生支援機構(博１年)第２種		①	0
日本学生支援機構(修１年)第１種＜追加＞		②	2
聖路加看護学園貸与奨学金（院）	18	15	15
木村看護教育振興財団 CNS 奨学金（修）	4	自己申請	―
東京水天宮助産師育成支援制度	7	3	2

守谷育英会	5	1	1
岡村育英会	4	3	3
交通遺児育英会	掲示のみ	自己申請	―
国際看護師協会東京大会記念奨学基金	掲示のみ	自己申請	―
青木奨学金	9	8	3
聖路加同窓会奨学金	3	1	1

○は内示数　2009.3.31 現在

表20　奨学生内訳表　学生総数477名（学部学生342名、大学院生135名）

学年	日本学生支援機構			東京都看護師等修学資金	聖路加看護学園貸与奨学金	その他奨学金	計
	1　種	2　種	小　計				
博３	3	0	3	―	4	0	7
博２	4	0	4	―	7	0	11
博１	1	0	1	―	7	0	8
修２	6	1	7	5	2	8	22
修１	※9	3	12	6	8	2	28
大学院小　計	23	4	27	11	28	10	76
	17％	3％	20％	8％	21％	7％	56％
学　部小　計	28	60	88	8	16	23	135
総　計	51	64	115	19	44	33	211
	11％	13％	24％	4％	9％	7％	44％

※辞退１名　　2009.3.31 現在

４．アルバイト

大学院生のアルバイトについては外部から求人があった場合に掲示している。

また、大学では、TA（ティーチングアシスタント）規程および RA（リサーチアシスタント）規程を設けており、これらは大学院学生本人の申請を受け、研究科委員会での承認を経て実施されている。時給については**表21**のとおりである。

表 21　ＴＡおよびＲＡ規程

	時　　給
ＴＡ規程	修士　　1,200 円
	博士　　1,300 円
ＲＡ規程	学内研究費の場合　1,300 円
	学外研究費の場合は当該研究費の規程による金額

５．福利厚生

学外施設、学生食堂等の福利厚生施設については、本章【学部】6.福利厚生で記した内容と重複するので、ここでは省略する。

６．健康管理

本館には、休養室を備えた健康管理室があり、専任の保健師１名が常駐し、学校医とともに健康診査、健康相談、応急処置、必要時医療機関などへの紹介を行っている。大学院生が使用している２号館には、救急箱と応急手当用のカッターベッド（担架用）が常備してある。今年度、小さな傷のための救急箱使用のみであった。

入学した修士、博士へは、健康管理オリエンテーションを行い、健康手帳を配布し、「自分の健康は自分で守る」ことを強調している。６月までに定期健康診断を聖路加国際病院予防医療センターと連携しながら実施している。

定期健康診断の実施項目は、学校保健法と結核予防法に準じ、**表 22** のとおりである。内科健診、一般検尿の受診者は、該当対象者（社会人を除く）全員である。健康状態調査と健診時の検査結果により、外来受診を助言した者は、内科５名、婦人科２名、精神科及びカウンセリングが２名であった。

健康管理室での健康相談に来談する者は主に修士生で、内容的には、学業面と身体面、そして人間関係など、学生生活の困難さと深く関係し、複合された問題を抱えていた。学内カウンセリングがスタートし、嘱託カウンセラーに相談を申し込む修士生、博士生も増加した。

表22　項目別受診者数

対象学年(人数)／項目	修士１年 (42*)	修士２年以上 (43**)	博士１年 (13)	博士２年以上 (37)	合　計 (135)
内　科　健　診	34	32	7	12	85
一　般　検　尿	34	32	7	12	85
Ｃ　Ｂ　Ｃ　検　査	34	32	7	12	85
ＨＢ／ＨＣ血液検査	34	32	7	12	85
ツベルクリン判定検査	34		11		45
胸部レントゲン検査	34	32	7	12	85

*うち８名社会人入学　**うち11名社会人入学

７．就職・進学に対する支援

募集求人に関する情報は、学内掲示板、学生部室の募集書類の専用棚などで提供している。

また教員公募の関係は、２号館掲示版に情報提供をしているが、いつでも閲覧できる広報の方法を検討する必要がある。

個別相談は、随時行う体制を整えている。大学院生の多くは、各専門領域の教員と相談している場合が多く、本年度は学生部に持ち込まれる相談はなかった。

就職状況は、大学院修士課程修了生は保健師２名、助産師７名、看護師８名、看護教員７名、進学その他10名であり、博士課程修了生は看護教員８名、その他1名であった（**表23**）。修士課程修了生は23.5％が看護師、20.6％が看護教員での就職であり、博士課程修了生は88.9％が現職のままあるいは新たに教職に就いている。

表23　2008年度大学院修了生進路（就職・進学）状況

大学院　博士前期課程修了生34名

看護師

聖路加国際病院（3）　杏林大学医学部附属病院（1）　東邦大学医療センター大森病院（1） NTT 東日本関東病院（1）　順天堂大学医学部附属練馬病院（1） 日本赤十字医療センター（1）	8

助産師

聖路加国際病院（1）　日本赤十字医療センター（1）　大森赤十字病院（１） 済生会横浜市東部病院（1）　横浜旭中央総合病院（1）　医療法人足立病院（1） 済生会宇都宮病院（1）	7

保健師

文京区（1）　青年海外協力隊 21 年度 1 次隊派遣国インドネシア（1）	2

看護教員

順天堂大学（2）　聖路加看護大学（1）　慶応義塾大学（1）　杏林大学（1） 神奈川県立保健福祉大学（1）　横浜創英短期大学（1）	7

進学その他

聖路加看護大学大学院博士後期課程（3）　厚生労働省（看護系技官）（1） 諸事情により就職せず（5）　未定（1）	10
計	34人

大学院　博士後期課程修了生９名

看護教員

静岡県立大学（2）　聖路加看護大学（1）　東海大学健康科学部看護学科（1） 東京女子医科大学（1）　杏林大学（非常勤）(1)　順天堂大学医療看護学部（1） 山梨大学大学院医学工学総合研究部（1）	8

その他

聖路加看護大学博士研究員（1）	1
計	9人